

## 書評

### 大山正 (監修)「元良勇次郎著作集」刊行委員会 (編集:大泉溥編集主幹) 『元良勇次郎著作集』(2013-17) 全15巻+別巻2 クレス出版

2017年12月の別巻2の配本で、「元良勇次郎著作集」全14巻と別巻2冊の計16冊の刊行が完了した。第1期の配本が2013年4月で、それ以降毎年ほぼ1回のペースで数巻が配本され、全巻が完成するまで4年の歳月が、準備期間を含めるとそれ以上の歳月が費やされた。まずはこの偉業を達成した刊行委員会のメンバーを讃えたい。

全14巻は、元良の著作『論文集』と『心理学概論』にそれぞれ1巻が与えられているのを除くと、著作と論稿が時代順に編集されている。それも厳密に発表順に並べられているのではなく、心理学・教育・社会・哲学・倫理・宗教等のテーマごとに集められている。またカタカナ遣いや変体仮名の混じる原本テキストが現代語に訳されている。こうした配慮によって現代の読者には読みやすくなっている。

各巻の冒頭には、主幹の手による「凡例」中にその巻の概要が載っている。これはその巻に収められた論稿が書かれた時代と、その時代への元良の関わりや彼の学的関心の発展についての解説である。このため読者は、各巻を読む前にその巻の概要を読むと理解しやすくなるだろう。もちろん興味のある元良の文章だけを読んでもかまわないが、それでも各巻の概要は読むに値する。

2巻からなる別巻のうち1冊(別巻1)は元良勇次郎関係資料で、元良の伝記、心理学、思想等について、彼が生きた時代から1990年代までに書かれたものがほぼ網羅されている。もう1冊(別巻2)は編集委員らによる解題で、主要テーマに沿って元良を解説する10の論文と補遺が収められている。これらの論文は著作集刊行事業のために新たに書かれたものであり、元良研究の現時点での到達点であると言える。

評者は第2期配本事業から翻刻者として現代語訳に携わり、それから毎年一定期間は元良の文章に向き合うことになった。日本語の表記が試行錯誤されている時代に書かれた文章のため、カタカナや漢語の混じる文章や旧字体の漢字に何度も戸惑った。初めて元良の文章を読んだときは、何度も読んでようやく意味がわかったことを思い出す。主幹から送られたPDFファイルのデータは印刷してもディスプ

レイに映しても文字がかすれるので、1つの文字を判読するために何倍にも拡大してディスプレイを眺めたことが何度もあったし、それでもわからなかったので原文を求めて遠くの図書館に赴いたこともあった。評者以外の翻刻者も同様の苦労をされたことだろう。

当初の計画では原文テキストの印影複写をCD-ROMにして付録にする予定だったが、別巻2で佐久間鼎による講義ノート等をCD-ROMにしたためにそれは割愛することになったようだ。この著作集で残念なことはこれだけである。心理学研究者にとってはわが国の心理学のルーツを確認するための貴重な資料であり、他の分野の研究者には明治期の一人の知識人の仕事を知るための貴重な資料である。本著作集を企画し編集された刊行委員会、それにこのプロジェクトの意義を理解して刊行を引き受けたクレス出版に敬意を表したい。

(鈴木聡志・東京農業大学)

